

Title	古版経済書解題 サー・エドワード・ウエスト著 一千八百二十六年版『穀物の価格と労働の賃銀』
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.10 (1936. 10) ,p.1539(133)- 1550(144)
JaLC DOI	10.14991/001.19361001-0133
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361001-0133">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361001-0133</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の収益の餘剰が伴ふだらうか、又それ故に一國の經濟的協力物をより、良くする事が可能であらうか。」(註七九)と。又オリソン曰く、經濟活動の結果を判斷する基準を設定する個人の數並びに欲望は、貿易に依つて著しく影響されるからして、全利益の比較の基礎は全く欠けて居る。(註八〇)と。即ち、生産物數量の増加、労働量の節約は、我々の經濟的厚生は高める爲の最も基本的なものには相違ない。併し乍らそれを受入れる主體は各個人であり、個人の欲望を充足して始めて厚生の実を擧げ得るのである。經濟的厚生は右の如き客觀的要素が存在し、然もそれが我々の欲望をより、多く満足せしめて始めて實現される。而してその點を考慮する手段は之を主觀的價值思想に求めなければならない。従つて客觀的價值思想を基礎として、更にそれと主觀的價值思想との有機的統一に於てこそ、完全なる政策的判斷の基調が置かれる事となる。其の他貿易政策原理確立の爲めには、更に幾多の吟味すべき問題が存在する。例へば經濟的厚生の配分關係、非經濟的條件の考慮等々、之等の問題に關しては、何れ稿を改めて論じざるを得ない。

(註七六) Harbeller, 'The Theory of Comparative Cost Once More,' Quarterly Journal of Economics, Vol. XIII 1929 p. 377.

(註七七) Viner, *ibid.*, p. 403-404.

(註七八) Viner, *ibid.*, p. 414.

(註七九) F. Eulenburg, *Grundriss der Sozialökonomik. Aussenhandel und Aussenhandelspolitik*. 1929. S. 313.

(註八〇) Ohlin, *ibid.*, p. 269. 但し彼は外國貿易の利益は、究局に於て生産物増加による事は認めて居る。 *ibid.*, 40, 45.

(一九三六・九・二〇稿)

## 古 版 經 濟 書 解 題

サー・エドワード・ウエスト著一千八百二十六年版

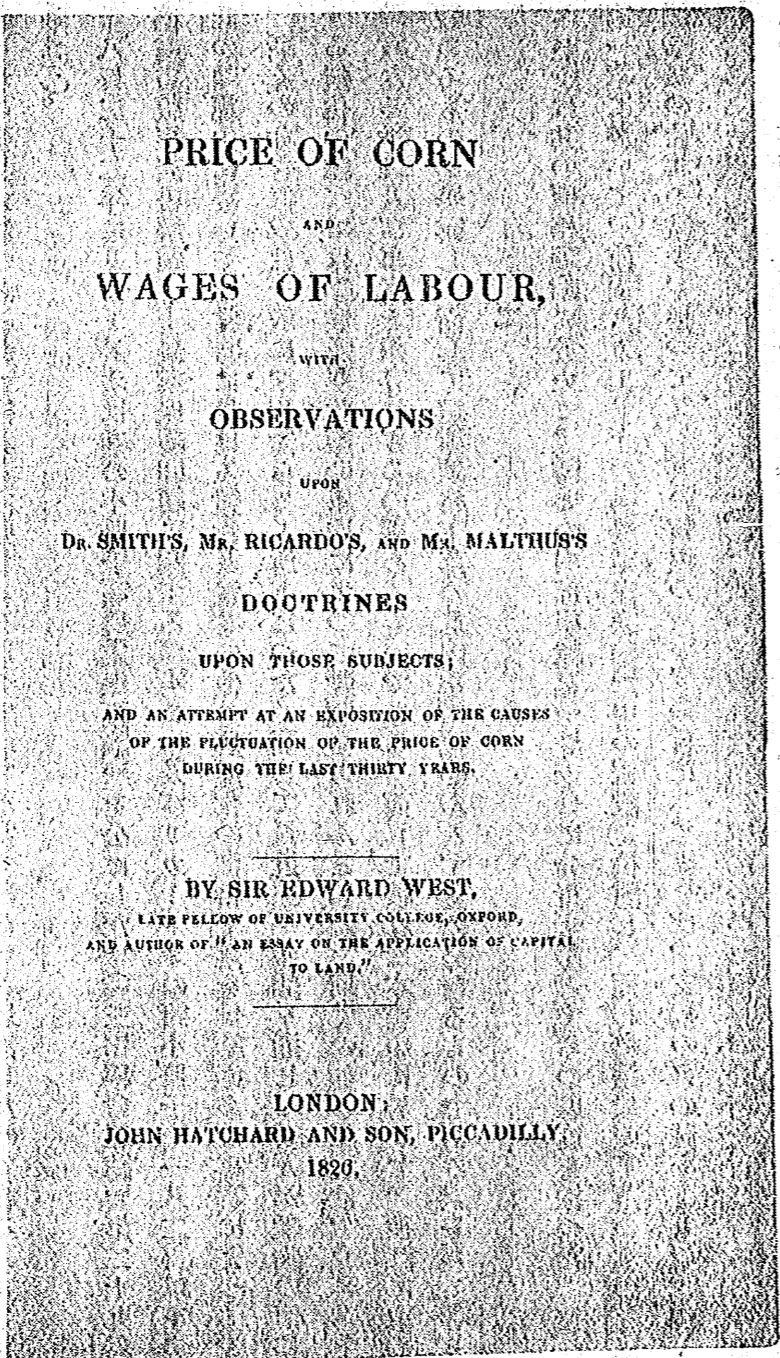
『穀物の價格と労働の賃銀』

高橋誠一郎

吾人は本誌第三十卷第三號に於いて、一千八百十五年版サー・エドワード・ウエストの名著『土地に對する資本の適用に關する論文』に就いて聊か解題を施した。茲には彼れの經濟學に對する第二の貢獻たる一千八百二十六年版『穀物の價格と労働の賃銀』(Price of Corn and Wages of Labour, with Observations upon Dr. Smith's, Mr. Ricardo's, and Mr. Malthus's Doctrines upon those subjects; and an attempt at an exposition of the causes of the fluctuation of the price of corn during the last thirty years. の表題頁を掲げ、併せて其の内容に就きて一言することとする。

吾人は前掲の解題に於いて、本書は其の著者の渡印に先立つて殆んど完成せられたものであるが、其の出版は著しく遅れて一千八百二十六年に及んだことを述べた。ウエストは此の年に於いて穀法問題が再燃せるに刺戟せられ、數日の閑を利用して、其の舊稿に若干の訂正を加へて上梓したのである。リカードは之れより先き一千八百二十三

年九月十一日を以つて永眠した。ウエストは此の書の序文に於いて、彼れの前論文中に表明せられた命題の多くのものがリカードオによつて其の『經濟原理』中に採用せられた旨を述べてゐる。而して彼れはリカードオが其の著の序文に於いて、惟り彼れがマルサスと共に「地代の眞學說」を發見せることのみを認めて、極めて重要な意義を有する他の諸原理が該論文中に於いて初めて表明せられたことを擧示することなかりしを怨言してゐる。彼れは富及び改良の進歩に連れて生ずることを認めらるゝ資本の純再生産即ち資本利潤の減少が必然農業に於ける勞働の生産力の減少によつて生ぜしめられなければならぬことを述べた。(Essay on the Application of Capital to Land, 1815, pp. 19-20)。リカードオは其の『經濟原理』に於いて曰く「利潤の自然的傾向は下落に存する、蓋し、社會及び富の進歩に連れて、要求せらるゝ食料の附加量は愈々多くの勞働の犠牲によつて取得せらるゝが故である」云。(Principles of Political Economy, 1817, p. 133)。ウエスト以爲らく、斯くの如きは別個の名辭を以つて表明せられたる精確に同一なる命題であると。(Price of Corn and Wages of Labour, 1826, Introduction, pp. v-vi)。ウエストは又、勞働維持の爲めの必需品を準備する際に於ける勞働の生産力の同一状態に於いては、勞働の眞實賃銀及び資本の利潤は一定の量であり、而して是れ等のもの、孰れか増加せらるゝとしたならば、這箇一方の増加は他のもの、失費に於いてはなければならぬと云ふ命題を初めて表明した。(而も著者は本論篇中に於いて斯くの如き提言に對して制限を設けんとする)。斯くて彼れは、「資本の純再生産たる資本の利潤は、勞働の生産力の減少によるか、若しくは是れ等の力を維持する經費の増加によるか、換言すれば、勞働の眞實賃銀の増加によるか、惟り二途のみに於いて減少せられ得ること」を述べた。(Essay, op. cit., p. 19)。而して同論文の推理の大なる部分は這般の原理の上に行はれた。同論文に於ける著書の推理の全體は又、あらゆる貨物が要求し、若しくは之れを生産



するが爲めに費す労働は其の交換價値の尺度であると云ふ原理の上に行はれた。彼れは是れ等並びに其の他の重要な諸原理の發見に對する彼れの權利を主張するを以つて敢て不當ではないと思惟したのである。(Price of Corn, pp. vi-vii.)

一千八百二十二年にリカードは其の小冊子「農業保護論」を公にした。(「三田學會雜誌」第二十九卷第十號所載拙稿「古版經濟書解題——農業保護問題に關するマルサス及びリカードの諸小冊子」一八二頁以下参照)。彼れは此の論篇中に於いて、當時に於ける穀物及び其の他の農産物の價格下落を供給過多の事實によつて説明せんとした。斯くの如き假設は一般に採用せらるゝ所と爲つた。而して最近三十年間を通じて吾人が穀物の價格に於いて目睹せる變化の總べては季候及び收穫の不同によつて説明せられんとした。斯くの如き學説は、ウエストに取つては、確實なる推理及び事實と相容れざるの觀あるものである。而して彼れは本書中に於いて、彼れに取つて謬想たるの觀あるものを暴露し、而して這箇價格下落の眞因を指摘せんとするに努むるものである。(Ibid., pp. vii-viii.)

二

ウエストは其の價格理論に於いて、需要の内部組織を一層十分に分析せんとするの態度を採つた。彼れは先づ本書の第一章に於いて、前掲リカードの「農業保護論」中の假設を検討し、而して這般の下落の主因を以つて明かに労働階級の仕事の減少、従つて又、其の賃銀の減少、一言にして盡せば、支拂の資の減少より生じつゝある需要の減少であると做してゐる。(Ibid., p. 16.) 次いで彼れは第二章に於いて價格の分析を行ひ、あらゆる貨物の價格を以つてそが賣買せらるゝ金若しくは銀の數量なりと做した。(Ibid., p. 25.) 斯くの如き定議よりして、そは賣買なくしては存在することを得ざるものである。或る個人に於いて其の貨物に就いての欲望、即ち之れを領有せ

んとするの願望及び之れを購入するの資あるに非ざれば、何等の購入も存することを得ない。欲望にして愈々緊切であるならば、斯くの如き欲望を抱懐する人は之れを満すが爲めに、若し必要であるならば、甘んじて其の資の愈々大なる犠牲を行はんとしつゝあるであらう、而して或る一定個人の資力にして愈々大であるならば、同一の欲望を満足するが爲めに甘んじて愈々多くを與へんとしつゝあるであらう。(Ibid., pp. 26-27.) 斯くて、あらゆる者が或る一定特殊の物品に對して、若し必要であるならば、甘んじて支拂はんとしつゝある價格の最大限は斯くの如き物品に就いての彼れの欲望及び之れに對して支拂ふの資力に對して複比例に於いて存す可きであらう。而して種々なる個人が或る一定貨物に對して、若し必要であるならば、與へんとする最高の價格は是れ等個人の欲望及び資力に依頼するが故に、是れ等の欲望及び資力と等しく無限に多様であるであらう。然しながら、購買者は彼れにしてより、少なきものに對して其の欲望する所のものを取得し得るとしたならば、其の能く與へ得る最高の價格を支拂ふことがないであらう。唯だ其の物品の供給、若しくは販賣せらるゝ其の數量が、甘んじて最高の價格を支拂はんとしつゝある者を満足するに充分でないとしたならば、そは總べて斯くの如き價格に於いて販賣せらる可きである、何となれば、各々は其の欲望する所のものを購入せんと努力す可く、而して之れを取得せんとする各々の努力は之れを最高の價格に引上げ可きが故である。然しながら、其の供給が最高の價格を支拂はんとする者を満足するに充分なるよりも大であるとしたならば、其の或るものは更らに小なる價格を支拂はんとしつゝある者に販賣せられなければならぬ、而も斯くの如き場合には、之れを取得するが爲めに、若し必要であるならば、更らに大なる價格を支拂はんとする者も、其の欲望若しくは資力が更らに限定せられたる者よりも以上に支拂はうとはしないが故に、全部の價格はより低き値を附する者の價格に下降す可きである。(Ibid., pp. 27-28.) 斯くてあらゆる貨物の

價格は其の供給の及ぶ最低階級の欲望及び資力によつて決定せらる可きである。(Ibid., p. 29.)

ウエストに取つては、需要のみ惟り價格を規制す可きものであり、又、需要は購買者若しくは値を附くる者の欲望及び資力並びに物品の稀少性に依頼す可きの觀がある。更らに専門的なる語を以つてすれば、需要は需要者の欲望及び資力と正比例し、貨物の數量と反比例して變化す可きである。斯くの如き意味に於ける需要はあらゆる物品の價格を規制す可く、而して需要は市場の現實の需要を意味す可きであつて、可能なる需要を意味することなかる可きである。(Ibid., pp. 23-24.) 吾人にして若し價格は需要及び供給が相互に對して有する比例によつて規制せらるゝと做すの命題を採るならば、吾人は固より需要を以つて需要者の欲望及び資力、若しくは彼れ等が如何なる事情の下に於いても與へんとする最高價格を意味するものとして考へなければならず、又、現實の價格は供給の稀少若しくは夥多が需要のより大なるか、若しくはより、少なる表示を喚起する際に昇低するものと看做さなければならぬ。他方に於いて吾人が價格は惟り需要のみによつて規制せらるゝと做すの命題を採用するならば、需要は其の際には單に需要者の欲望及び資力のみならず、又物品の稀少性に依存す可き現實的需要を意味する。物品の供給は其の際には需要の要素と看さる可く、而して需要は其の物品の稀少若しくは夥多に従つて増減す可きである。(Ibid., p. 29.)

然しながら、吾人が會つて言へるが如く、ウエストは更らに進んで斯くの如き所言中に看出され得る限界效用の觀念を構成するには猶ほ頗る大なる距離を隔て、居つた。(昭和四年版拙著『經濟學史』二二二頁参照)。却つて彼れは讀者に親しみのない新理論の誘入によつて混亂を更らに大ならしむるを欲せざるを理由として前命題を採用したのである。(Ibid., p. 30.)

斯くて彼れは次章に於いて、其の當面の問題たる穀物の價格は供給の一定せる状態に於いては需要、若しくは社會の下層階級の欲望及び資力によつて決定せらる可く、又彼れ等の欲望が不變であるとしたならば、彼れ等の資力の高に於けるあらゆる變化は穀物の價格に影響しなければならぬと觀るのである。全人口は麵麩の消費者であるが、而も其の購買の資力は甚しく相違する。而して麵麩の價格は上層富裕階級の資力に依頼せずして、全然下層労働階級の其れに依頼する。總べての上層社會階級、並びに價格如何に拘らず常に其の欲するだけの麵麩を取得し得る總べての者の所得が増加したとしても、彼れ等は麵麩の消費を何等増加することなく、又之れに對する需要は増加せらるゝことがないであらう。然るに貧困なる労働階級は非常なる豊年に非ざれば、其の欲するだけの麵麩を取得することがない。而して是れ等の階級の所得のあらゆる増加は直ちに穀物に對する需要を増加す可きである。即ちあらゆる者は其の増加せる所得を以つて更らに多くの麵麩を購入せんことを企圖す可きが故である。(Ibid., pp. 31-33.)

## 三

ウエストは第四章に於いて、其の讀者の注意を労働賃銀の問題に誘つた。労働の價格は總べての他の價格と等しき法則、即ち供給と需要とが相互に對して有する割合によつて規制せられる。(Ibid., p. 62.) 然しながら、彼れに従へば、労働の價格と労働の賃銀とは甚しく相違せるものである。労働の價格は労働の一定量に對して支拂はるゝ高であり、労働の賃銀は労働者によつて收得せらるゝ高である。労働の賃銀、即ち労働者によつて收得せらるゝ高は依然として同一であつても、勤勉及び努力の増加、若しくは仕事の増加に由つて、彼れは同一の賃銀に對して更らに多くの労働を遂行することある可きである。而して労働の價格は斯くの如き努力、若しくは仕事の増加に比

例して減少せらるゝであらう。又、労働の価格は依然として同一であつても、努力若しくは仕事の増加せる同一の事情に由つて、労働の賃銀は著しく増加せらるゝことがあるであらう。略言すれば、労働の賃銀は労働の価格と遂行せらるゝ労働の定量とに依存する。斯くの如き區別は、一見した所では、瑣々たるの観があるかも知れぬが、而も、吾人があらゆる貨物の生産費は労働の価格に依頼し、労働者の食料、衣料及び諸必需品の高は労働賃銀の高に依頼す可きことを考察する際に、大なる重要性あることを發見せらる可きである。(Ibid., pp. 67-68.)

ウエストは賃銀基金説を排撃する。労働に對する需要及び其の価格は恰も他のあらゆる物に對する需要及び其の価格と同様に増加す可きである。別様に想像するの誤謬は總べての経費が結局労働者に赴くと做すの見解から生ずる。斯くて、余が直接に一労働者を使備するも、又は労働によつて造られなければならぬ一個の帽子又は一枚の上衣を購入するも、帽子商若しくは仕立屋は余が彼れに支拂へる賃銀を生産的なるか若しくは不生産的なるか孰れかの労働に投じなければならぬが故に、同一額は労働に對して支拂はれると稱し得るかも知れぬ。斯くの如き論法は苟も名聲ある總べての經濟學の主題に關する著作中に採用せられた。相異なる態様の経費の唯一の結果が労働の將來の収益を増加し若しくは減少するに存すると云ふことは常に證明を俟たずして明かなること、認められてゐる。即ち其の経費は生産的若しくは不生産的労働者の孰れかに分配せらるゝが故である。(cf., Adam Smith, *Wealth of Nations*, vol. ii, p. 4.) 此の學說の上に陸海の兵士に對する政府の需要は労働の賃銀を増加することがないと云ふ主張が打建てられる。蓋し斯くの如き需要は年収益を増加することを得ず、又政府は單に政府が使備しなければ個人によつて使備せらる可き人々を使備するに過ぎず、而して彼れ等を使備するものが個人に非ずして政府である唯一の結果は是れ等の個人が是れ等の人々の總べて、若しくは少くとも其の或るものを生産的に使備す可きに反し、

政府は不生産的に彼れ等を使備するに存するが故であると稱せられる。斯くの如きは、吾人にして若し單に「眞實」賃銀のみを考察して、賃幣を全然吾人の考察の外に抛擲するならば、部分的に眞であるかも知れぬ。労働者支持の爲めの資本が一定せられたる高のものであり、而して其の高が必然其の年の間に労働人民に對して支出せられたとするならば、そは労働に對する需要若しくは政府によつて陸海の兵士の如き不生産的の人々の上に費さるゝと、個人によつて生産的労働者の上に費さるゝとを問はず、其の費さるゝ賃銀の高に何等の相違をも生ぜしむるを得ざる可く、全人口は其の年内に這般の資本の全部を取得す可く、而して彼れ等は其の以上を取得することを得ざる可きである。然しながら、吾人が事實を其の在るがまゝに、又、社會状態を其の存するがまゝに受け容るゝの時、即ち吾人が賃銀を以つて實物を以つて支拂はるゝに非ずして、賃幣に於いて支拂はるゝものと考ふるの時、結果は甚しく相違することを看出さる可く、賃幣に於けるより、大なるか、若しくはより、少なる経費が労働人口に與へらるゝとある可く、従つて彼れ等の賃幣賃銀は騰落す可く、彼れ等の消費に取つて必要な諸物品に對する彼れ等の需要は増減し、而して其の價格及び數量は同一比例に於いて増減す可きである。ウエストに取つては、上述せるが如き論法の過誤は同一の賃幣が遂行す可き種々なる職能及び交換を顧慮することなきに發したるの觀がある。アダム・スミスによつて使用せられたる論法を採用し、賃幣を吾人の考察の外に置き、而してあらゆる物が實物に於いて支拂はるゝと想像するも猶ほ、其の國の眞實資本及び労働のより、大なるか若しくはより、小なる割合が労働者に對する必需品を準備するに使用せられ、又より、小なるか、若しくはより、大なる割合が富者に對する奢侈品を準備するに使用せらるゝこと等があり得可きである。(West, op. cit., pp. 81-84.)

斯くて或る一國の労働を其の年の間維持するが爲めの眞實資本が一百萬クォーターの穀物、一百萬枚の上衣等で

あり、而して労働者等は二百萬であると假定する。然るに是れ等労働者等の一部分が富者に對する奢侈品等を準備するに使用せられ、自餘の部分が労働支持の爲めの必要品を生産するに使用せらるゝことがあるであらう。前の方面に費さるゝ労働の部分が愈々大なれば、後の方面に費さるゝ労働の部分は愈々小なる可く、而して労働者支持の爲めに生産せらるゝ資本の高は愈々小なる可きである。ウエストは問ふ、過去三十五年間の窮乏期を通じて巨額の義捐、教區の贈與及び増加せられた扶持の結果は如何であつたか、其の結果が労働貧民の貨幣實力を増加し、而して穀物の價格を其の然らざる場合に到達す可かりしよりも遙かに高き點に引上げたことは明かではあるまいか。一國の金銭上の實力若しくは金銭上の資本のより大なるか、若しくはより少なる高が労働に費さるゝことがありはしまいかと。(ibid., pp. 84-85)。

而して彼れは労働に對する需要が單に一國の富若しくは資本の高若しくは増加率のみに依頼すると做すの學説を以つて經濟學の主題に關するあらゆる有名なる書の殆んどあらゆる頁に滿ち互つてある極めて重大なる誤謬と看做して之れを排撃せんとしたのである。(ibid., p. 8586)。然らば、労働に對する需要は眞に如何に規制せらるゝのであるか。ウエストは「社會の欲望及び實力によつて」と答へる。欲望は種々なる事情に依頼する。常に生産的労働を使用する者によつて之れよりして生ぜしめらる可き利潤、陸海の軍務の爲めに政府の召集急なること、僕婢を使備する者の嗜好、等、等が是れである。是れ等欲望の緊切の程度の大小に従つて労働に費さるゝ使備者の資本の割合に大小の相違がある可きである。ウエストは活潑なる商況が何等資本の増加なくして賃銀を増加し得可きことを認める。資本及び労働の使用者は十人の労働者を使備し、而して是れ等の労働者等は其の労働が二個月間費されたる物品を生産する。而して彼れは直ちに之れを賣り、斯くて又其の資本を償ひ、併せて利潤を擧げることがを

得せしめられる。今、是れ等十人の労働者が其の仕事に對し同一賃銀率を以つて一日に二倍の仕事をするを假定する。彼れ等の賃銀は日割によれば二倍と爲り、其の物品は一個月間に、即ち半分の時間を以つて生産せられて、費されたる資本に對して同一の利潤、即ち二倍の利潤を與へる。蓋し利潤は一定期間に於ける資本に對する利得なるが故に、収益の速度の増加は生産率の増加に等しき結果を有す可きである。資本が一割の増加即ち利潤を以つて二箇月中に一度其の所有者に返還せしめらるゝも、又は五分の利潤を以つて同一期間に二度返還せらるゝも、孰れも殆んど同じ事である。唯だ後の場合には前の場合に存することなかる可き利潤の上に利潤を重ねることがあるであらう。其の結果は賃銀の倍加、労働者に取つての總べての必要品に對する需要及び其の價格の増加及び利潤の増加であるであらう。敏活なる業務は賃銀、利潤及び地代を増加し、不振の業務は三者の總べてを減少す可きである。リカードは労働の賃銀から労働の價格を區別することがなかつたが爲めに、賃銀と利潤とが相共に増加し得可きことを認めなかつたのである。恐らく労働の價格と利潤とは相共に増加することを得ないであらうが、労働に對する需要と其の貨幣賃銀とは何等其の國の資本の増加なくして増加せらるゝを得可きであらう。(ibid., pp. 85-88)。

ウエストは實に賃銀を以つて人口と資本の一定部分、即ち賃銀の支拂に割當てられたる部分に依頼すると做すの意見を明確に表明せる彼のマカラックの『經濟原論』出版の翌年に於いて、夙に、労働者の収益の大きさの影響を或る程度まで會得せることを示してゐる。彼れの名は賃銀に關する収益説の發達史上に於いて明記せらる可きものである。

彼れは第五章に於いて穀物の供給に就いて述べ、戦時の高價格若しくは平和時の低價格が前者に於ける凶作若し

くは後者に於ける豊作によつて生ぜしめられたものでないことを述べ、概して、穀物の高價格が繁盛なる商況と一致し、低價格が其の不振と一致するを以つて論争の餘地なき所と做し、繁盛なる商況が必然労働人口の仕事、彼れ等の賃銀額を増加し、而して是れ等のものを通じて穀物に對する需要及び其の價格を増加し、不振銷沈の商況が恰も之れと反對の結果を有せざるを得ざることも亦明かであると説き、(Ibid. pp. 89-90)。第六章に於いて、穀物價格に及ぼす通貨價值變更の影響に就いて論じ、(Ibid. p. 117)。而して最後に結論として、彼れは彼れが是れまで説明し來つた諸原理を國家の現狀に適用せんことを期したのである。(Ibid. p. 133)。

其の一千八百十五年の第一著中に於いて土地收益遞減法則及び地代學說を表明してリカードオの先驅者と爲り、古典的經濟學說の發達に貢獻する所のあつたウェストは、其の一千八百二十六年の第二著中に在つては飽くまでもリカードオに對して抗争的態度を持し、其の價格理論に於いては暫く、需要のみ惟り價格を規制すると做すの説を主張し、其の賃銀學說に於いては賃銀基金説を排して正統派經濟學說より離れんとするの概を示したのであるが、遂に是れ等の點に於いて充分なる發展を見ることなくして終つた。彼れが最晩年の事業たる更らに一般的なる經濟問題の論述が完成せられずして終つたことは返す返すも遺憾である。

## 天保の貸借帳消令の實例

(社會經濟史資料紹介)

野村兼太郎

如何なる世の中でも金銀は片寄りがちであり、かつ借りた者は容易に返済し得ないのが常である。經濟狀態が行詰つて來ると貸借關係の争ひが多くなつて來る。さうした場合にわが國ではかなり古い時代から貸借帳消令が出てゐる。所謂徳政の一つである。徳川時代におゐてかう云ふ場合に多く採用された手段は金銀出入は取捌かぬ、相對にすべしと命じ、法の保護を撤去することであつた。元祿十五年閏八月に、前年末迄の金銀貸借訴訟を取上げぬことを令してゐる。さらに又享保四年十一月金銀出入を受理せぬ旨を令し、金融梗塞する傾向があつたので、同十四年十二月、同年一月以降の分を受理することとした。越えて延享三年二月、四箇年以前の貸借に關する訴訟を受理せざる旨を令してゐる。松平定信の寛政の改革には旗本、御家人を保護するために、棄捐令をさへ發してゐるのであるから、一般の借金に對しても不受理の方針を採つた。この寛政九年九月の法令は貸借關係に對する時の當局の態度を示すものであるから、左に掲げて置く。